ルカ 23 章 13〜25 節「私たちの咎のために」

今日の箇所にはイエス様の十字架刑がどのように決められていったのかについて書かれています。総督ピラト、ユダヤの指導者たち、そして民衆が登場します。そのそれぞれに見られる罪人の姿に示されている警告を受け取り、イエス様の十字架の意味を確認したいと思います。

１．ピラトのジレンマ

イエス様は木曜の夜、ゲツセマネの園で祈り終えたところを捕えられ、大祭司の家に連れて行かれました。真夜中にユダヤの最高法院が開かれ、神を冒涜する者として死罪に定められました。そして金曜の朝、ユダヤの指導者たちはイエス様を総督ピラトのもとに連れて行き、訴えました。ピラトは「この人には、訴える理由が何も見つからない」(:4) と訴えを退けようとしました。

ピラトは指導者たちと民衆を集めて、話します。判決を下すということです。訴えに対してピラトが判断したことは、「おまえたちが訴えているような罪は何も見つからなかった」というのです。イエス様に罪がないと言っているのはこれで 2 回目です。

また、イエス様に罪が見つからないということは、自分一人がそう判断しているのではなく、「ヘロデも同様だった。私たちにこの人を送り返して来たのだから」と言います。

結論としてピラトは「見なさい。この人は死に値することを何もしていない」と言います。死刑にすべき罪はないと繰り返したのは 3 回目です。

このようにピラトが言っているのはローマの法律に照らして罪がないということですが、もちろん聖書が語る神様の御前での罪という意味でも、主イエス様には罪はまったくなかったことを聖書は伝えています。

ピラトはこの件を収めるために一つの提案をします。16 節。イエス様に懲らしめを与えれば、ユダヤ人は釈放を認めてくれるだろうと考えたのでしょう。ところが、ピラトの読みは外れました。18 節。指導者たちは民衆を焚き付けていました。彼らがこのように叫んで、バラバの釈放を求めたのは、祭りの時に総督が囚人を一人釈放するという恩赦の慣例があったからでした。ピラトはこの慣例を用いてイエス様を釈放することを提案したのです。ピラトの二つ目の提案です。しかし、ユダヤ人はそれを受け入れませんでした。「暴動と人殺しのかどで」捕えられていた犯罪者バラバの釈放を求め、イエス様を処刑するように求めます。「十字架だ。十字架につけろと」と叫び続けました。ここでもまたピラトの読みは外れました。

それでもピラトは何としても総督としてユダヤ人を従わせたいのです。22 節。ピラトの 3 回目の提案です。そして「彼には、死に値する罪が何も見つからなかった」と言っているのは 4 回目です。ピラトはここでもこれまでと同じ提案をします。ユダヤ人の間で処理するようにさせたいのです。

けれども、ユダヤ人はますます加熱していきます。23 節。ユダヤ人はあくまでもイエス様を十字架につけることを求めました。たくさんの巡礼者が過越の祭りのためにエルサレムに集まって来ています。宗教的な意識が高まっているときです。その中で、神を冒涜したとされる者を釈放したら、どんな騒ぎが起こるか分かりません。騒動となり、ローマ皇帝に知られるなら、総督としての自分の立場が危うくなります。結局、ピラトはユダヤ人の要求を受け入れざるを得なくなりました。

２．人々の罪の態度

こうして、イエス様は十字架につけられることになりました。ここにいたるまでに、その場にいた人々、すなわち指導者たち、民衆、そしてピラトの罪が重なっていました。

祭司長、律法学者、パリサイ人などの指導者たちはイエス様を妬み、怒りに燃えていました。自分たちは律法を守っていて神様の前に正しいのだと、自分で自分を正しいと決め、自分たちに反対する者は悪で、そのような邪魔者は取り除かなければならないと思っていました。自分たちの立場と権威を守り、自分たちの思い通りに事を動かそうとしていました。

同じような態度が今の人々にもあるでしょう。世界の国々の一部の指導者たちにも見られます。それだけでなく私たちにもあるでしょう。自分の立場を守ろうとして、また自分の思い通りに事を動かそうとして、いろいろな力を使うことがあるのではないでしょうか。

神様がそれぞれの立場に立ててくださったのであれば、私たちはまず神様のみこころを求めなければなりません。神様のために、教会のために、隣人のために、謙遜になって主のみこころを求めていく必要があるでしょう。

民衆はどうだったでしょうか。指導者たちに扇動されたのですが、無責任に人々と一緒になって叫んでいたのです。イエス様が自分たちの期待通りの救い主ではなかったとなると、一転して除き去ろうとしたのです。
これと同じような態度も今の人々にもあるでしょう。周囲の人たちと一緒になって、流されて、行動してしまうことがないでしょうか。神様を恐れるのではなく、人を恐れてしまうことがないでしょうか。
私たちは、神様がご覧になっておられることを思い起こす必要があるでしょう。神様は義であるお方、またあわれみ深いお方であることを覚えていたいと思います。自分の願い通りではなくでも、主は最善のうちに導いてくださることを信頼するなら、平安を与えられます。

ピラトはどうだったでしょうか。イエス様には死に値する罪が何もないことを認めていました。そのことを何度も語りました。そして、イエス様を釈放しようと何回か試みました。けれども結局、群衆の強い叫び声に負け、暴動が起こることを恐れ、イエス様を十字架につけることを認めて引き渡しました。自分が失脚することを恐れ、自分を守ろうとしたのです。
正しいことだと分かっているのに、そうしないことを決めるのなら、私たちもピラトと同じようです。周りから圧力があるかもしれません。その中でも正しいことを主張し、理解してもらうことは大変なことでしょう。神様のみこころにかなうことであるとの確信が与えられるなら、それに堅く立ち続けるように祈ることができ、そして神様が助けてくださいます。

３．主イエスの十字架の意味
罪人たちの罪によってサタンが勝利して、イエス様が引き渡されたように見えます。しかし、イエス様は神様の救いのご計画を知っておられ、ご自分が十字架につくべきことを知っておられましたので、その中においても、自らを父なる神様に委ねていかれました。
イエス様は神の御子でありながら、人としてこの世に来られました。罪のない生涯を過ごされたにも関わらず、自らの正しさを主張することなく、十字架刑が決まる時にも黙っておられました。イエス様は神の御子だから、苦しみ、痛みを感じなかったということではありません。大きな苦しみ、激しい痛みを受けておられました。しかし、それを忍ばれました。イエス様は自分を守ろうとしませんでした。人を恐れず、父なる神様に従い通しました。自ら十字架に向かって行かれたのです。そして、十字架上でイエス様は祈られました。「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです」(:34)。イエス様の言動の動機は徹底して父なる神に対する従順と人々に対する愛でした。
そのイエス様の十字架の意味は、その時よりも 700 年も前に旧約聖書に預言として語られていました。イザヤ 53 章 4〜6 節。この預言はイエス様によって成就しました。イエス様の十字架の死の意味がここに語られています。罪のないイエス様が十字架で苦しみ、死なれたのは、私たちの罪のためでした。5 節に「彼は…私たちの咎のために砕かれたのだ」、6 節に「主は私たちすべての者の咎を彼に負わせた」とあります。イエス様が私たちの罪を代わり負って、身代わりとなって刑罰を受けてくださったので、私たちは平安を与えられ、癒されます。罪を赦されて、救いをいただくことができます。イエス・キリストの十字架には神の義と愛が表されているのです。
新島襄のエピソード。校則に違反した者たちの罰を自らの手をステッキで叩いて受けたのは、父なる神様が私たちの罪を御子イエス様に負わせて十字架につけたことに表されている神の義と愛に倣って、自ら表した行動でした。

私たちの罪咎を代わりに負って十字架で死なれたイエス様を仰ぎましょう。イエス様の十字架の死によって、信じる私たちを永遠のいのちに生かしてくださる神様に感謝を献げましょう。